

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 亮一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002206

方言研究

佐藤 亮一

(国立国語研究所 名誉所員)

方言研究は記述的研究、地理的研究、社会言語学的研究の3分野に大別される。国立国語研究所における方言研究はこれらのすべての分野にかかわってきたが、ここでは主として別に扱われている社会言語学的研究を除く部分について述べる。

そうは言っても、国立国語研究所における方言研究は、多かれ少なかれ社会言語学的側面を含んでいるものが大部分である。

たとえば、国立国語研究所の方言に関する最初の刊行物である『八丈島の言語調査』(1950)は、全体の約3分の2を各集落の方言的特徴を記述することに費やしているものの、調査の目的は、「1. 共通語を話す度合いを調べる、2. 言語の地域による違いを調べる」(同書2ページ)とあり、その第1の目的は「共通語化」という社会言語学的視点に立つものであった。この調査ではサンプリングによって抽出した216名に面接し、性・年齢・学歴・職業・居住歴・旅行歴・ラジオの聴取度等の諸条件と共通語を話す度合いとの関係について統計学的手法を用いて分析している。また、同書に続いて刊行された『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』(1951)は「地域社会における方言と共通語」(第1部)と「個人の1日の言語生活」(第2部)で構成されている。

『八丈島の言語調査』では「言語形成期」(5歳～13歳)という概念を設定しているが、この術語はその後の方言研究に大きな影響を与え、伝統的方言を調査するためには、少なくとも言語形成期に調査対象地域に居住していることがインフォーマント(方言話者)の条件であるとされるようになった。

八丈島の調査は1949(昭和24年)6月に行われた。これは国立国語研究所が設置されたわずか6ヶ月後であり、終戦後4年に満たない時期であった。

『八丈島の言語調査』には、その冒頭に詳細な「行動記録」(日誌)が記されている。これは研究報告書としては異例のものである。たとえば、出発日の6月28日には「午後研究所デ送行会。午後3時研究所出発。部長ハジメ5氏ノ見送り。5時藤丸ニ乗船、月島出帆。船ヤヤ揺レル。」とあり、予定より5時間遅れて翌日13時に島に到着している。そして7月12日の日誌には「朝6時半、月島上陸。一夜ノウチニ雨ノ国カラ晴天ノ国ニ移ッタ感深く、全員研究所ニ入ル、7時30分。」とあり、当時の所員たちの熱気が伝わってくる。当時研究第一部長であった岩淵悦太郎氏の「はしがき」によれば、当時八丈島には5日おきにしか船が出ていなかったそうであるが、現在はジェット機が1日3便就航し、所要時間は50分である。この報告書には、当初予想した言語形成期(に島に居住していたことの有無)の共通語化に与える影響は比較的小さく、むしろ

島外居住歴の有無が共通語化に与える影響が大きいことを指摘しているが、これは、現代社会における交通網の発達が共通語化（あるいは共通語使用能力の増加）に与えた影響が少なくないことを示唆するものであろう。

国立国語研究所は各年度に『国立国語研究所年報』（以下、『年報』）を刊行しているが、その第1号（1951）に記載されている研究テーマの一つに「東京方言および各地方言の調査研究」がある。このうち「各地方言」の研究は前述の八丈島を対象とするものであった。東京方言の調査結果は単行書としては刊行されていないが、その調査結果は『年報1』に具体的に報告されている。アクセント・音韻・文法の各分野についてそれぞれの言語形式のユレを調査したもので、この調査結果は、その後の東京方言研究者に影響を与え、発展を見せている。

設置後2年度目に当たる1950年度には地方調査員制度が整備され、各都道府県に原則として各1名の調査員（それぞれの地域の方言研究者）を委嘱した。この制度はその後の研究所における方言研究の発展に大きく寄与する画期的なものであった。当初は毎年度異なるテーマを設けて各地の調査員に調査を依頼し、その結果を報告書として提出してもらおうという形式をとっていた。その報告書の大部分は出版されていないが、国立国語研究所図書館に保管されている。地方調査員は、その後地方研究員と改称された。地方研究員制度は1999年度を最後に廃止されたが、現在は、全国方言調査委員という形で、小規模ではあるが存続している。

1954年度から研究室の名称が変更になり、方言を担当する研究室は「地方言語研究室」と改称された。文字どおり方言を専門に研究する研究室が誕生したことになる。この年度には、各都道府県の地方調査員に担当地域から1地点を選び、その地域の方言を体系的に記述する調査研究を依頼した。その報告は『日本方言の記述的研究』（1959）として刊行された。本書は北海道江差町から鹿児島県種子島に至る15地点の方言を音韻（アクセントを除く）と文法について体系的に記述したもので、方言記述の基本的な方法を知る上で、また、諸方言の特徴を概観するのに役立つ。本書の刊行はその後の方言の記述的研究に影響を与え、また、類書の刊行を生む契機となった。執筆者によって記述法に差が見られる部分もあるが、それぞれに特色があり、記述のモデルとして参考にされた。本書は地方調査員からの報告の一部を収録したものであるが、そのほかの報告書は国立国語研究所の図書館に保管されている。

国立国語研究所における方言研究の中で、画期的な調査研究は『日本言語地図』刊行のための調査の開始である。調査は1955（昭和30）年度に始まった。『年報7』（1956）には「方言地図作成のための準備研究」というテーマのもとに、その目的を次のように謳っている。

方言地図は、言語学・国語学界に広くいろいろな資料を提供すると考えられるので、その作成は学界・識者の多年要望するところであった。特に、日本語史の解明のためには是非とも必要なものの一つである。地方言語研究室では、地方調査員の調査・研究を中心として、全国的な方言地図を作成することになった。

ここでは、調査の目的を「日本語史の解明」に絞っている。今日では、日本語史の解明に古文獻と方言分布の両面からのアプローチが必要なことは常識であるが、文献国語史全盛のこの時期に、方言の分布が日本語史の解明に役立つことを明言していることは注目に値する。

しかし、調査開始後11年目に刊行された『日本言語地図・第1集』（1966）の解説書で、その第1ページに記された「調査の目的」では、「1. 現代標準語の基盤とその成立過程（を言語地理学的に解明する）」、「2. 日本語の地理的差異の成立と、各種方言語形の歴史（の解明）」となっており、当初謳われた「日本語史の解明」という表現がかなり後退しているように見える。その理由は明らかではないが、その背景には国立国語研究所設置法の条文があるのではないかと筆者は推測する。「設置法」には「方言研究」「方言調査」という文言はどこにも見あたらない。「年報7」に見られる「方言地図作成」ということばが、実際に刊行される際には『日本言語地図』となった理由もそのあたりにあるのかもしれない（ただし「解説書」（1966）の36ページには、国立国語研究所が設置されたばかりの1948年12月の評議員会において言語地図作成の提案があったと記されている）。

それにもかかわらず、『日本言語地図』（略称LAJ）の刊行は「日本語史の解明」に大きく寄与した。早くは廣戸惇氏・長尾勇氏などによるLAJと文献とを対比した日本語史研究の論文が見られ、LAJの企画・作成担当者である柴田武氏・徳川宗賢氏・加藤正信氏も同様の研究論文を発表している（廣戸1986など；長尾1978など；柴田1963,1965など；徳川1970,1972など；加藤1973など）。また、全6巻刊行後には、（当時の）若手研究者である安部清哉氏・小林隆氏によってこの分野の研究が大きく進展した（安部1988a,1988bなど；小林1982,1983など）。一方、「標準語の基盤とその成立過程」に関しては、關西方言が標準語となった例が非常に多いことは明らかになったものの、この問題に関して、LAJを利用した本格的な研究論文は見あたらない。

調査開始の年である1955年12月に開催された「地方研究員全国協議会」では5人の研究者が発表しているが、その中に前田勇氏による「語彙より語法を」という論題が見える。この時期にはLAJが語彙を中心に調査することは決まっていたであろう。なぜ、LAJは語彙項目が中心になり、文法や音声の項目はわずかしかとりあげられなかったのか。その間の事情を筆者は聞いていないが、明治期の国語調査委員会による全国調査は音韻と文法（口語法）は調査しているが語彙は対象にしていないこと、柳田国男の『蝸牛考』や小林好日の『方言語彙学的研究』などの影響も考えられる（柴田武氏は国立国語研究所創立50周年記念誌の座談会の中で、「インフォーマントの能力から考えて語彙でなくてはだめ」という発言をしている）。さらに言えば、LAJの調査項目の選定に大きく関わった徳川宗賢氏が民俗学や俚言に強い関心をもっていたことが挙げられる。

日本における言語地理学の発展に大きく寄与したのは1950年に来日したベルギーの言語地理学者W.A.グロータース神父である。柴田武氏は前述の座談会の中で、「グロータース神父が言語地図の調査をやったらどうだと言ったことはないが、神父が現れたことが（国語研究所における言語地理学の発展にとって）決定的であった」と述べている。ただし、グロータース神父が東京に転出し、国立国語研究所に出入りするようになったのはLAJの調査が開始された1955年であるから、LAJ作成の計画に、発足段階では、神父は関与していないと思われる。

なお、LAJが文法ではなく、語彙を対象にしたことは、結果的に適切な判断であったと思う。LAJの調査が終了した1964年から44年経過した今日、日本の伝統的方言の語彙（俚言）の多

くは絶滅状態に近いと考えられる。仮に、LAJの次に国立国語研究所が刊行した全国的言語地図である『方言文法全国地図』(略称GAJ)の調査が始まった1976年に、語彙を対象とする言語地図作成の調査を開始していたら、LAJのような鮮やかな分布は得られなかったであろう。LAJはまさに日本の伝統的な方言語彙(明治・大正期に使われていた共通語化の影響の少ない方言語彙)の分布を示しており、1955~64年はそれを採集できる最後のチャンスだったのである。それに比べると文法事象は、少なくともその根幹部分に関しては、GAJの調査期間である1976~82年には、高年層はもちろん、中年層にもかなり使用されていたし、現在でも、語彙に比べればかなり残存率が高いのではないだろうか。

LAJの調査や、同時期に開始された柴田武氏・徳川宗賢氏・馬瀬良雄氏・グロータース師による新潟県糸魚川地方の言語地理学的調査は日本の方言学界に大きな影響を与え、1970年以降は(当時の)若手研究者による全国各地の言語地図の作成とその解釈が行われるようになった。一方LAJの作成が1980年代以降の社会言語学的研究の進展に寄与した面もある。それは国立国語研究所の地方言語研究室がLAJの作成と併行して行った「日本語地図検証調査」の影響である。LAJは調査に10年(準備調査期間を含む)、全6巻の編集作業に10年、合計20年の歳月を要している。この編集期間中にはほぼ毎年テーマを変えて「検証調査」が行われた。この調査は、毎日、言語地図作成工場で働いている工具のような室員に、各地のフィールドワークを体験させ「いやして」やろうという当時の徳川室長の「親心」のあらわれであったと思う。この検証調査は、LAJが方言語彙の限られた側面(世代=高年層、場面(文体)=くつろいだ場面(文体)、話者=各地点1名・生え抜き・男性、意味=限定、調査=1回のみ)を調査していることに鑑み、その周辺状況(同一地域における個人差、地域差と年齢差、地域差と場面差、意味構造と地域差、10年後の再調査)との関連を見ようとしたもので、その研究成果は『方言の諸相』(1985)として刊行された。糸魚川地域における「地域差と年齢差」では両者の関連を2次元のグラフで示す手法を開発し、このグラフを「グロットグラム」と名づけた(名称の提案者は高田誠氏)。この名称と手法はその後多くの研究者により、各地の方言調査で用いられるようになった。

なお、毎年テーマを変えてのフィールドワークはLAJ完成後も続き、その成果を『方言研究法の探索』(1988)として刊行した。

LAJの調査が開始された1955年に、地方言語研究室の上村幸雄氏が担当する『沖縄語辞典』の編集が始まった。『年報7』(1956)には地方言語研究室の仕事として「地域社会の言語生活の調査研究」という統一テーマの下に、「方言地図作成のための準備研究」と「琉球首里方言辞典の編修」というテーマが掲げられている。『沖縄語辞典』(1963)は、鳥袋盛敏氏執筆の原稿「琉球語辞典」(収録語数約1万2千)を大幅に修正し、音韻と文法について解説を加えたもので、刊行後高い評価を得て、これまでに版を重ねている。方言語彙の記述は俚言だけではなく、その地域で使用されている語彙のすべて(共通語形を含む)を含めるべきであると、柴田武氏ほかの方言研究者が主張していたが、その理想を最初に実現したのはこの辞典であり、その編集の精神は長田須磨・須山名保子・藤井美佐子『奄美方言分類辞典上下』(1977・1980)、仲宗根政善『今帰仁方言辞典』(1983)、山浦玄嗣『ケセン語大辞典上下』(2000)に引き継がれた。

LAJの調査が終りに近づいた1963年度から3年間、「各地方言の共通語との対照研究」が行われた。これは、「地方における共通語の教育、ことに共通語の文法の教育に役立つ資料を得るために、各地の方言の文法と共通語の文法とを対照的に研究する」(『年報15』)ことを目的とし、秋田市、京都市、鹿児島市の3方言を対象に調査を行ったものである。この研究は1966年度以降、「全国方言文法の対比的研究」に引き継がれた。「対比的研究」は66年度・67年度の2年間行われ、動詞の諸形態を中心にした調査票Ⅰ(上村幸雄氏作成)と、特定場面における応答詞・待遇表現・終助詞の使い分けを見ようとする調査票Ⅱ(話しことば研究室の宮地裕氏作成)を用いて、国立国語研究所員7名と地方研究員47名が全国の都道府県を対象に調査を行った。

上記の研究の成果は公開されていないが、この研究の枠組み、および、研究の成果は、その後の『方言文法全国地図』(1989～2006)の調査研究の基礎になったと筆者は認識している。

1974年度にLAJが完結した(徳川宗賢室長のもとでLAJの編集作業に当たったのは、野元菊雄・加藤正信・本堂寛・高田誠・白沢宏枝の各氏と筆者であり、グロータース神父も非常勤職員として編集作業に協力した)。この年度に「地方言語研究室」は「言語変化研究部第一研究室」と改称された。LAJの編集に中心的な役割を果たした徳川室長が大阪大学に転出して筆者が室長になったが、その段階で最初に行った研究は「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」であった。この研究は「急速に変化し、失われつつある方言を、現時点で録音文字化(標準語訳・脚注つき)し、定本として永久に保存し、国語研究の基本的資料とする」ことを目的とするもので、1974年度から1976年度までの3年間、地方研究員の協力を得て実施し、その成果を『方言談話資料・全10巻』(1978～1987)として、録音テープつきで刊行した。方言の会話を全国的な規模で録音文字化し、録音資料つきで刊行したのは、日本放送協会編『全国方言資料・全11巻』(1966～1972)が最初のものであるが、『全国方言資料』が各都道府県2地点(そのほか「へき地・離島編」「琉球編」がある)、各地点の録音・文字化量が15分程度にあるのに対し、『方言談話資料』は全国20地点、各地点の録音・文字化量は約1時間であり、地点数はNHKのものより少ないが、録音・文字化量が多いことに特色がある。

この『方言談話資料』に強い関心を示した文化庁は1977年度から1985年度にかけて「各地方言収集緊急調査」を行った。これは全国47都道府県でそれぞれ5地点を選び、それぞれの地点で3時間の会話を録音・文字化しようという、きわめて大きな計画であった(この調査は、当初、国立国語研究所が実施することを打診されたが、そのときには、すでに方言文法の全国調査計画が準備段階にはいっていたため、変化第一研究室としては辞退した記憶がある)。この調査には国語研究所の地方研究員を初めとする全国の方言研究者が動員され、最終的に延べ2000時間を超える録音・文字化資料が収集された。この資料は、その後、文化庁から国立国語研究所に移管され、1997年度より科研費の公開促進費データベースの交付を受け、国立国語研究所編『全国方言データベース・日本のふるさとことば集成・全20巻』(2001～2008)として、CDおよびCD-ROM付きで刊行された。本書は、収集された資料の中から、各都道府県1地点(沖縄は2地点)の老年層男女の自然会話を選び、その地点の伝統的方言がもっともよく現れている部分を、各地点30～50分程度データベース化したもので、日本における方言の録音・文字化資料

として現行最大のものである。本書の編集は国立国語研究所情報資料部門の井上文子氏が中心になって行った。

国立国語研究所における『日本言語地図・全6巻』に並ぶ大きなプロジェクトは『方言文法全国地図・全6巻』（略称GAJ・1989～2006）の刊行である。

この調査研究は「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」の最終年度に当たる1976年度に「各地方言文法調査の準備的研究」としてスタートし、「方言における音韻・文法の諸特徴に関する研究」（1977～1981年度）、「文法の諸特徴についての全国的調査研究」（1982年度）のテーマのもとに準備調査と本調査を実施した。1983年度から編集作業を開始したが、第1集が完成したのは1989年であるから、第1集の編集作業に6年を要したことになる。

筆者は第1集刊行後に他の機関に転出したが、その後の編集作業は沢木幹栄・小林隆・大西拓一郎・吉岡泰夫・三井はるみ・白沢宏枝の各氏に引き継がれた（なお、企画・調査の段階では真田信治氏が室員として参加している）。最終的に、GAJは調査に7年間（準備調査3年、本調査3年、補充調査1年）、整理・編集に23年、合計30年の歳月をかけて完成したことになる。調査には国立国語研究所地方研究員を中心とする各地の方言研究者の協力を得ており、また、編集には多数の非常勤職員、研究協力者が参加している。

GAJはLAJと外見や地図の体裁がよく似ている。しかし、その編集方針には両者に大きな違いがみられる。言語地図は解釈地図であるべきだという考え方が柴田武氏やグロータース師によって主張され、LAJもその考え方に沿って編集された。しかし、GAJは資料地図であるという立場を明示し、作図者の解釈が作図に影響しないよう最大限の努力をすることとした。その方針に沿って、GAJの編集に当たっては厳密な作業規則を設けた。

また、原資料（報告されたカード内容のすべて）を「資料一覧」として解説書の中で公開し、また、言語地図や資料一覧をインターネット上にも公開した。これは日本における言語地理学史上、画期的なことと考えたい。これは、LAJが手作業（大部分は白沢宏枝氏の手による）で版下を作成したのに対し、GAJは作図を電算機で行ったことによる。LAJでも原資料を「見出し内容一覧」「注記一覧」として整備し、国立国語研究所図書館で閲覧に供しているが、現在のところ公刊はしていない（ただし、LAJの原資料（報告されたカード）はデータベース化されつつあり、近く公開が予定されている）

GAJの調査・作成が進行しつつある時期に、それと直接関係があるわけではないが、日本語の文法研究は理論的に急速に進歩した。そのこととGAJの刊行とが相互に影響して、方言を対象とする文法研究も盛んになりつつある。国立国語研究所が刊行した報告書の中で、学術論文への引用は、かつてはLAJが最も多かったそうであるが、近年はGAJの引用が増えつつある。

GAJ全6巻が完結した2006年の11月10日、日本方言研究会第83回研究発表会（岡山大学）で、「『方言文法全国地図』の完結をめぐって」と題するシンポジウムが開催された。その中で国立国語研究所長の杉戸清樹氏が「国立国語研究所における方言研究の歴史と展望」と題する講演を行った。杉戸氏は、国語研究所が現在検討中の方言に関する研究計画について、次の3点を挙げた。

1. インターネットを介した方言状況把握の全国ネットワーク作り
2. 全国 1000 地点からの速報性のある言語状況把握
3. 愛知県岡崎市での敬語経年調査の 3 回目

このうち、3 は現在具体的な計画が進みつつある。

また、同じ年の 12 月 16 日に、国立国語研究所で「方言文法の全国分布と全国方言調査の将来像」と題する公開研究発表会が開催された。その夜は関係者が一同に会して GAJ の完結を祝い、また、国語研究所の方言の研究室（第一研究室・地方言語研究室・変化第一研究室・研究開発部門第 2 領域）に所員として最も長く勤務し、方言に関するほとんどの調査研究を補佐した白沢宏枝氏に所長より感謝状が贈られた。

以上、国立国語研究所が行った過去 58 年間の方言に関する調査研究（社会言語学的研究を除く）について概観した。今後の方言研究の方向について、国立国語研究所の担当部門は現在模索中であるという。『日本言語地図』『方言文法全国地図』『日本のふるさとことば集成』に共通の特色は「全国的視野」「組織的な大規模調査」「日本語研究の基礎資料の作成」の 3 点である。この 3 本柱は国立国語研究所における調査研究の原点であると思う。

国立国語研究所が立川に移転したとき、杉戸新所長は「言語生活の研究に重点をおく」と挨拶した。「言語生活」は、現在は廃止された国立国語研究所設置法に明記された文言であり、国立国語研究所員が中心になって編集した筑摩書房刊の月刊誌『言語生活』（休刊中）の誌名でもある。

柴田武氏は国立国語研究所創立 50 周年記念誌の座談会の中で「所員会議をやっても、昼のあと何かの話し合いをしてもすぐ「言語生活」ということが話題になる。ところが、それが何なのか、議論すればするほどわからなくなってくるんですよ。けれど西尾先生はみんなの議論を楽しみにしてらっしゃった。西尾先生がいらっしゃる会では例外なく「言語生活、言語生活」とおっしゃる。ともかく国語研究所は言語生活を研究するところだと」と発言している。

これからも国立国語研究所員は「言語生活」とは何かを議論しつつ、斬新な調査研究を進めてほしいと思う。

参考文献

- 安部清哉（1988a）「〈庭〉の変遷における方言分布の四つの層」『文化』51, 1-25, 東北大学文学会
- 安部清哉（1988b）「〈旋風〉の変遷における方言分布の四つの層 古代語彙の二系列」『フェリス女学院大学紀要』23, 57-89, フェリス女学院大学
- 加藤正信（1973）「国語史と言語地理学—「蜻蛉」を例として—」『文学・語学』66, 61-74, 全国大学国語国文学会
- 小林 隆（1982）「文献と方言分布からみた〈くろぶし（罌）〉の語史」『国語学研究』22, 41-58, 東北大学文学部「国語学研究」刊行会
- 小林 隆（1983）「〈顔〉の語史」『國語學』132, 51-64, 国語学会
- 柴田 武（1963）「単語の全国分布」『人類科学』15, 149-176, 九学会連合

- 柴田 武 (1965) 「言語地理学の方法と言語史の方法」『ことばの研究』2, 155-170, 国立国語研究所
- 徳川宗賢 (1970) 「言語地理学と言語史」『文科系学会連合研究論文集』20, 40-54, 文科系学会連合
- 徳川宗賢 (1972) 「ことばの地理的伝播速度など」服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会編『現代言語学』, 667-687, 三省堂
- 長尾 勇 (1978) 「墜栗花考—ツイリの語史と分布」『語文』44, 12-20, 日本大学国文学会
- 廣戸 惇 (1986) 『方言語彙の研究』風間書房